

聖德太子撰勝鬘經義疏總序に見られる女人成仏思想

龍村 龍平

聖德太子の女人成仏思想を考察するためには、種々の方法がある。太子自身の生涯の行動から探る方法、太子の著作である三経義疏から探る方法等がある。太子と比較し得る、中国や日本の仏教思想家等との相違を考察する方法もあるだろう。

私は、この小論考に於て、太子の最も代表的な著作であり、女人成仏思想を説く最高の經典である勝鬘經の研究書である勝鬘經義疏について考察を加えてみることによつて、太子の女人成仏思想を明らかにしてみようと思う。しかし、聖德太子の研究は、近年飛躍的な発展を示し、その思想のあらゆる面に於て、優れた考察が加えられており、当然、太子の女人成仏思想の面に於ても何らかの形で既に研究し尽くされているようである。太子の代表的な著作である勝鬘經義疏を研究する際には避けて通ることのできない問題が、女人成仏思想であるということも大きいだろう。私は、それらの優れた研究に対して、異論を唱える者ではないが、このような見方も可能なのではないかということを示す述べて見たいと思う。

勝鬘經は、女人成仏思想を説く經典である。その經典を太子は勝鬘經義疏という形で理解されたわけである。この場合重要なことは、太子は勝鬘經に説かれている女人成仏の思想以外のことを別に

説かれたわけではないということである。つまり、勝鬘經義疏を通して太子の女人成仏思想を考察することとは、太子がどの程度完璧に勝鬘經に説かれている思想を把握されたかを探ることである。以上のような観点に立つ時、勝鬘經義疏の中でも、その總序に注目することが重要になってくるのではないかと思う。總序の中にこそ太子の女人成仏思想理解の究極が述べられているはずであるからである。

以下總序の中の女人成仏思想について少し検討して見たいと思う。總序のまず最初は、夫勝鬘者、本是不可思議。何知如来分身、或是法雲大士。（四天王寺会本）という文章で始まる。ここで太子は、勝鬘經の主人公である勝鬘夫人を、その本質に於て如来であり法雲の大士であると見られている。その次は、但遠照躡闍之機、宣以下女質、為教化。となつている。つまり、勝鬘經に於て、勝鬘夫人という女性が主人公になつて經典を説くのは、必然性があつたということである。ここで躡闍之機、つまり阿踰闍国の人々を教化するために女性の姿が必要であつたとあるのは、阿踰闍国というような当時のインドの一小国の国民を仏教に引き入れるという意味より、全世界の人々、全歴史上の人々に對してという意味である。何故、女性の姿で説くことが必要であつたかということとは、後述する仏教思想史の大きな流れを考察する時、明らかになつてくる。さらに続いて、所以、初則生於舍衛國王、尽孝養之道、中則為阿踰闍友称夫人、顯三從之礼、終則影響、釈迦共弘摩訶衍之道。となつている。勝鬘夫人は、釈迦と共に大乘の道を弘めるといふ大任を受け持つたわけである。女性の身でありながらということが重要である。さらに続けて、論其所演、則以二十四為体、談其大意、

非近是遠レ為レ宗ト。とあり、非近は遠、つまり小乗を否定し大乘を肯定するというような、大乘の根本的な立場を、彼女は堂々と述べるということである。最後の文章は、所以如レ來ニ毎ニ説ニ讚ニ同ニ諸ニ仏ニ、
発スレ言ヲ則チ為スニ述ツ成ツ。となっており、彼女の説くところは、釈迦の諸仏の説くところと同じであるという讃辞を持つて承認されたのである。

以上が總序の全文であるが、この文章は、勝鬘經全体の根本的な主旨について述べているのはもちろんのことであるが、その全文が勝鬘經の女人成仏思想について述べていると受け取ることも可能な文章になつてゐる。さらに今日我々が勝鬘經そのものを理解しようとする時、太子の理解が完全無欠であることがわかる。太子の理解が完全無欠であることを、証明するためには、勝鬘經そのものの検討も重要であるが、仏教思想史の大きな流れの上に立つた、勝鬘經經說の理解、さらに太子の理解把握を検討することが不可欠である。

仏教思想史の大きな流れとしては、まず仏教の創始者、釈尊には、女性差別の思想はなかつたにもかかわらず、その後の歴史の中で女性に対して偏見、差別が生じた。それは主に男性仏道修行者にとつて、女性の誘惑を断ち切ることが極めて困難であつた現実的な問題が原因である。しかし何と言つても、全人類の成仏が仏教の終極的な目的であり、釈尊の真意でもあるわけだから、女人成仏の大理想を実現することこそ仏教徒の真の目的であるはずである。釈尊の真意、仏教の真の目的の達成の為にインドで起こつた大乘仏教運動が女人成仏の大理想の実現を目指したことは当然の帰結であつた。つまりインドに於ける大乘仏教運動によつて、釈尊の真意を受

け継いだ、さらに中途の女人不成仏思想を否定した形で真の女人成仏の仏説が打ち立てられたのである。勝鬘經こそは、大乘仏教運動の女人成仏の大理想を主張する最も代表的な經典と言える。

さらに重要なことは、大乘仏教の女人成仏の主張は、先程述べたように、釈尊の時点では生じていなかった女性差別、女人不成仏の思想が、仏教内に於てその後の歴史の中で生じてしまつたことを十分に認識して為されなければならなかつたということである。そのことは、大乘仏教に於ては、二度と女性への偏見が生じないように、明確に女人不成仏思想、女性への偏見を否定する形が要求されたということである。勝鬘經は、以上のような点を踏まえて、經典の主人公、語り手に女性を登場させたのであり、その説くところが、非近は遠というような大乘の根本的な論理であるということも、女性の仏教理解、仏教哲学の主張が最高の水準に達し得ることを示していると言えるわけである。

要するに結論としては、我が国の聖徳太子は、仏教発祥の地インドに於て、今後一切の女性への仏教の偏見、差別が生じ得ないようにな完全無欠な最高の女人成仏思想を説くところの勝鬘經というものによつて、女人成仏思想を理解することができたわけである。しかし我が国に於ては、インドに於けるような偏見、差別、女人不成仏思想の前提条件が存在しなかつたため、太子の最高の理解は、鎌倉新仏教に至るまで孤立したものとなつた。鎌倉新仏教の祖師達によつて、真の女人成仏、救済が可能になつたように普通言われているが、我が国仏教の出発点の聖徳太子の仏教思想の中に既に完全無欠な女人成仏思想の理解があることに注目すべきだと思う。